

# 「松尾芭蕉 枯枝に・笠やどり」画賛

雲 英 末 雄（文学学術院教授）



枯枝にからすの

とまりたるや

秋の暮

笠やどり

坡翁、雲天の笠の下には、

江海の義を振。無為のちまたに、

雨やどりし給ふめる西行の侘笠、

哀に貴シ。鶯のぬふてふ梅の

花笠は、老をかくして、妹が

あたりのしのび笠、行過兼て

笠やどり、ひぢ笠の雨に打そぼつ

覧、みかさと申せ。蓮の葉の笠、

いさぎよし。此笠は是艶ならず、

美ならず、ひとへに山田守捨し案山子の、

風に破られ雨にいためるがごとし。笠の

あるじも又、風雨を待て、情尽る而已。

世にふるは

更に宗祇の

やどり哉

泊船堂芭蕉翁

「印」(虚)「印」(無)

絹本彩色一軸 縦三一・七×横八二・六センチ

## <はじめに>

絹本彩色のみごとな大幅の本資料が、個人の所有から2006年3月、本図書館に正式に納入されたことは慶賀に堪えない。わたしはこの件にいささか関わりがあったので、まずその経緯について述べてみたい。

1973年、岡田利兵衛先生（1892～1982）は本資料を鑑定され、翌年3月の俳文学会誌『連歌俳諧研

究』第46号に芭蕉真跡として公表された。天和2年（1682年、芭蕉39歳）頃の染筆で、研究者はこの絵に描かれている27羽の鴉の数の多さに衝撃を受けた。それは今まで「寒鴉枯木」のたった1羽の鴉のイメージがあまりにも強かったからである。

本資料は東京都文京区湯島の骨董商A氏が四国の方面から見つけてきたもので、それを岡田先生が鑑定。その後、野田市在住のA氏の実兄B氏に

譲られ、さらにB氏没後は子息のC氏に所有が移った。わたしは岩波書店から刊行の『芭蕉全図譜』にその写真を収録するため、しばしば存命中のB氏を訪問し知遇を得た。『芭蕉全図譜』刊行直後の1993年12月には、本図書館で芭蕉没後300年を記念して展覧会を開催したが、その折には本資料を借用して展示した。その後本資料は1996年野田市郷土博物館に寄託され、市の依頼を受けて同年6月2日、わたしはB氏も出席された会で講演をさせていただいた。B氏は90歳近い御高齢で逝去され、本資料はC氏が受け継がれた。そのC氏から昨年4月、思いがけずわたしは手紙をいただき、譲渡の相談を受けた。

わたしは個人で購入出来そうな2、3の知人を思い浮かべたが、こうした名品は公共機関にあるべきだと考え、本図書館の特別資料室に交渉した。あれやこれや煩雑な手続きや多くの時間をかけ、神田のI書店を通すことで購入が決定した時は安堵の胸をなでおろした。しかも市場価格からすれば驚くほどの廉価で納まったのは、まことに幸いなことであった。

それにしても人と人との出会いがあり、そうした出会いの縁によって、今回のように貴重な資料が本図書館に入ったのは、わたしにとってうれしく、忘れがたいものとなった。

#### <資料的価値>

現在確認されている芭蕉真跡資料は約450点程であるが、本資料は其中でも年代的に初期40点以内の筆跡として、また堂々とした大作である点重要視されるものである。筆跡は深川芭蕉庵入庵の2年後、天和2年(1682)頃に染筆されたもので、筆勢は曲節に富み、大字小字をとりまぜ競った高揚した当時の精神をそのまま反映させている。句の「枯枝に」にしても中7が「からすのとまりたるや」と字余りになっており、天和期の破格調句の典型を示している。また「笠やどり」の俳文は、旅の象徴である「笠」を中国の蘇東坡や日本の西行の「笠」など、さまざまに例示し、自らもそうした「わび笠」の伝統につながろうとする意思を表明。「世にふるは」の句も敬愛する連歌師、宗祇の「世にふるも更に時雨のやどり哉」(老葉註)を強く意識したものである。「笠やどり」の俳文は、その後「笠の記」(貞享3、4年頃成)に変化してゆく。「笠

やどり」はいろいろな笠を示して、いわば「笠づくし」だが、後者「笠の記」では芭蕉自ら旅の笠を張り作る「笠づくり」へと内容が変わってゆく。そうした過程のもっとも初期の形態が本資料なのである。

本資料の署名は「泊船堂芭蕉翁」とある。「泊船堂」は隅田川が小名木川と合する三叉近くに芭蕉庵を設けた際の堂号。この堂号の使用例としては、「櫓声波を打て」等四句入句文懐紙について古い用例で重視される。またこの時点で、自ら「芭蕉翁」と染筆しているのも注目されよう。押印は「虚」(白文)「無」(朱文)とあり、この用例は本資料のみである。「虚無」には、芭蕉が深く傾倒した老荘思想の、人為を加えることのない自然のままの境地を示しており、いかにもこの時期の芭蕉らしい印文といえる。

本資料は絹本にみごとな色彩の絵が描かれているが画者は不明。しかし狩野派の本格的な絵師と思わせるに足る十分な筆力を備えている。なお本資料は秋・冬の景と賛を配したものだが、対になる春・夏の景と賛を配したものが存在する可能性もあるのではないだろうか。

あれこれ述べたが、本資料の資料的価値がきわめて高いことは御理解いただけたであろう。

#### <おわりに>

芭蕉は俳諧を追求してたえず俳風を変化させている。それと同時に筆跡自体も変化させている。本資料は前述したように筆跡としては初期のものだが、それが貞享後期になると、俳風の蕉風開眼とともに転じて典雅・優美なものに変わる。さらに最晩年になると「かるみ」の風体によって、筆勢もきわめて軽快なものにまた変化する。

本図書館には貞享5年(1688)の典雅・優美な芭蕉真跡一軸もすでに所蔵している。それゆえ次には未収の最晩年の「かるみ」の筆勢のみられる真跡を加えられるよう、切に希望したい。

(2006年6月2日記)